



# Essenz Philharmoniker

エッセツ・フィルハーモニカー

第5回定期演奏会

2025.2.2 SUN 14:00 開演  
文京シビックホール大ホール

# ごあいさつ



©Takashi Fujimoto

今日は、エッセツ・フィルハーモニカー第5回定期演奏会にご来場いただき誠にありがとうございます。

今回で5回目となった本定期演奏会では、ブラームスの名作たちを演奏いたします。初めに演奏します交響曲第3番は、実は今までに何度も選曲で候補に上がりながらあと一歩及ばず...が続き、今回ようやく演奏が実現できた曲です。「念願のブラ3!」ということで、この曲を目当てに参加してくれたメンバーも多くいるようです。そして、後半はピアノ四重奏曲第一番のシェーンベルク編曲による管弦楽版をお届けします。あまり演奏機会の多い曲ではありませんが、原曲の良さはそのままに、天才シェーンベルクが素晴らしいオーケストレーションを当てた大変な名作です。

そして、このブラームスの名作たちを指揮いただく高井優希さんとは、今回が初共演となります。とは言うものの、これも実はメンバーのほとんどが学生時代に高井さんの指揮、指導を経験しているため、初めからとてもフランクにかつ我々の特徴を掴んだ的確な指示でリハーサルを指導いただきました。リハーサル後の交流会(飲み会)も大いに盛り上がり、とても楽しく充実したシーズンを送ることができました。高井さん、ありがとうございます!

さて、当団は2020年の結成以降、ここまで順調に活動を行ってまいりました。当初は所謂“一発オケ”として始まったエッセツ・フィルですが、やっているうちにノッてきてしまった我々は「あの曲もやろう!」「これもやりたい!」と演奏会の企画が止まらず、気づけば5年目の活動に入りました。昨年の第4回定期演奏会以降は運営態勢を強化し、ホームページの開設やSNSの拡充なども行い、より一層活動に熱が入ってきています。

「とにかく楽しくやろう!」これは当団の不変のモットーです。日々仕事に追われながら、限られた休みの時間をこのオーケストラ活動に注いでいる我々にとって、エッセツ・フィル=いつ来ても楽しい場所、としていられるよう今後も精一杯取り組んでいきたいと思えます。

どうぞ、最後までごゆっくりとお楽しみください。

委員長 清水 颯太



## Program



### ブラームス 交響曲第3番

- I. Allegro con brio
- II. Andante
- III. Poco allegretto
- IV. Allegro - Un poco sostenuto

— 休憩 (20分) —

### ブラームス(シェーンベルク編曲) ピアノ四重奏曲 第1番(管弦楽版)

- I. Allegro
- II. Intermezzo. Allegro ma non troppo
- III. Andante con moto
- IV. Rondo alla zingarese. Presto



©Takashi Fujimoto

## エッセツ・フィルハーモニカー

2020年、一橋大学管弦楽団の若手OB・OGを中心に結成。「とにかく楽しくやろう!」をモットーに年一回の頻度で演奏会を開催。これまでにベートーヴェン、ブルックナー、マーラーなどドイツ、オーストリアの交響曲を中心に取り組んできた。高井優希氏との共演は初となるが、団員のほとんどは学生時代以来の関係となるため、双方に対する信頼は厚い。団名に冠したエッセツ(独語:Essenz)は「本質・真髄」といった意味を持つ。



©Masaaki Hiraga

### 高井 優希 指揮

*Takai Yūki* Conductor

第4回黒海(コンスタンツァ)指揮コンクールにおいて第1位受賞。

これまでに、札幌交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、セントラル愛知交響楽団、中部フィルハーモニー交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、大阪交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、広島交響楽団、九州交響楽団、琉球交響楽団、コンスタンツァ国立歌劇場管弦楽団、ローマ・イタリア管弦楽団など、国内外のオーケストラと共演。日本バチカン国交樹立75周年記念コンサート、田尾下哲演出オペラ「ラ・ボエーム」などの指揮のほか、NHK「LIFE!～人生に捧げるコント～」番組収録のための指揮指導にも携わった。

幼少よりピアノを学び、成蹊高等学校卒業後、東京藝術大学指揮科およびライプツィヒ・メンデルスゾーン音楽演劇大学指揮科卒業、東京二期会、藤原歌劇団、ニッセイオペラ、東京室内歌劇場、藤沢市民オペラなどの公演において副指揮者を務めた。

ウルリッヒ・ヴィントフル、田中良和の各氏に指揮を師事。また、ヨルマ・パヌラ、コリン・メッターズ、エルヴィン・アチェル、小林研一郎、佐藤功太郎、小田野宏之、松尾葉子の各氏の薫陶を受ける。

2019年度山田貞夫音楽賞特選。2020年度セントラル愛知交響楽団アソシエイトコンダクター。武蔵野音楽大学非常勤講師。東京藝術大学附属音楽高等学校非常勤講師。

## ヨハネス・ブラームス 交響曲第3番

1883年作曲

【編成】

フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット  
ホルン4、トランペット2、トロンボーン3  
ティンパニ  
弦五部

本日は、エセンツ・フィルハーモニカー第5回定期演奏会にご来場くださり、ありがとうございます。

唐突ですが、お客様にとってクラシック音楽は、身近なものでしょうか。また、クラシック音楽について、どの程度ご存知でしょうか。私は、現にこうしてオーケストラに参加しているわけですから、言うまでもなくクラシック音楽は好きですし、日常的にも聴きはするのですが、決して詳しいわけではありません。

失礼いたしました。お客様が今お読みになっている文章は、ブラームスの交響曲第3番の楽曲紹介で間違いございません。

本来このような場では、曲のエピソードや楽曲構成、あるいは作曲家の生涯などといった内容が語られるべきなのでしょう。しかしながら、私はそのような事をご紹介できるだけの幅広い知識は持ち合わせておりませんし、仮に文献等にあたり、なんとか“一般的な”楽曲紹介の文章を書いたとしても、浅学な私では、音楽理論や音楽史の先生方の著作の劣化品にかなりえまません。

そこでこの場では、音楽的な解説は簡単なものにとどめておき、私の個人的なお気に入りポイントをメインに文章を進めさせていただきたいと思います。「とにかく楽しくやろう!」がモットーの弊団では、このような暴挙も許されましょう。

さて、冒頭の問いに戻らせていただきます。お客様にとって、クラシック音楽はどのようなものでございましょうか。

お客様にとってクラシック音楽が馴染み深いものでございましたら、この文章は「ブラームスの3番についてやたらと語ってくる人に捕まった」という体でお読みいただき、もし共感してくださる点がございましたら、幸いです。

逆に、「クラシック音楽の事はよく分からない」というお客様にとっては、この曲紹介と本演奏会が、(一般的に敷居が高いものだと誤解されがちな)クラシック音楽という素晴らしい世界への入口となっただけならば、それ以上に喜ばしい事はございません。

なお、楽曲構成の分析については、全音楽譜出版社による本交響曲のスコア、『ゼンオンスコア ブラームス: 交響曲第3番 へ長調 作品90』(2017)に付されている、音楽学者の野本由

紀夫先生の解説を参考にしています。また、その他に野本先生の解説文を直接引用している箇所もございますが、該当箇所は斜体としております。

### 第1楽章

6/4拍子のへ長調。なお、第2主題のみ9/4拍子。ソナタ形式。

さて、曲の冒頭から奏でられる第1主題ですが、喻えるなら大河の流れのような、雄大な自然から湧き上がってくる、うねりのあるエネルギーに溢れている、という印象を受けます。どこか不安定なところがありつつも力強く勇壮な響き、これこそが正にブラームスの魅力であると、私は思っています。

この、私が感じた「大河の流れ」「うねり」「不安定」といった印象の言語化として、野本先生の解説を引用いたします。野本先生は、この交響曲の特徴の1つとして「拍節感の喪失」を指摘しており、この第1楽章第1主題をその一例として挙げながら、「メロディそのものがリズム上ヘミオラ的」「内声部(ヴィオラ)がシンコペーションになっていることも、拍節感の喪失に一役買っている」と述べています。(譜例1)なるほど...



譜例 1

大河と言えば、このメロディはどことなくシューマンの交響曲第3番「ライン」の第1楽章第1主題に似ているような気がします。ご存知でない方は、こちらも素敵な曲ですので是非一度お聴きになっていただきたいのですが、実は、私達エセンツ・フィルハーモニカーは、第1回記念演奏会にて「ライン」を演奏しております。演奏者としては、この拍の取りづらさ、合奏でキレイに縦が合わないもどかしさ... どことなく思い出すものがあります。(執筆者はコントラバスなので、今回は「大変そうだなあ」と思いながら見ていました。)

続く第2主題(譜例2)は先述の通り9/4拍子で、穏やかな旋律が木管楽器を中心に奏でられますが、途中ここにヴィオラが加わり、音色に多層感を与えます。第2主題が終わると拍子は6/4に戻り、分散和音を主とした経過句を経て、ここまでの呈示部を冒頭から繰り返した後、展開部へ移行します。



譜例 2

展開部では、短調の速いテンポで第2主題が歌われた後、テンポは抑えられ、程なくして第1主題を元にした下降音型を繰り返します。

いま、「テンポは抑えられ、程なくして」と軽く済ませた部分ですが、小節数にして11と決して長くはないものの、私が特に



気に入っている部分の1つです。ヴァイオリンとヴィオラのシンコペーションに乗って、ホルンをメインにゆったり歌い上げられる旋律は、まるで沈みゆく夕陽のようで、とても落ち着きます。

先述の第1主題を元にした下降音型が力を溜めるように強くなっていくと、楽章冒頭の管楽器が鳴り、再現部へと続きます。再現部で第1主題と第2主題が再現された後、やはり分散和音の経過句から冒頭へ戻りますが、ここからがコーダとなります。緊張が高められたあとで緩み、その後テンポは遅いまま一度強奏となりますが、やはりまた緩み...といった事を、第1主題の断片を繰り返しつつ行い、最後はゆったりと楽章を閉じます。

## 第2楽章

4/4拍子のハ長調。野本先生は、「三部形式による楽章と捉えられるが、あきらかにソナタ形式を下敷きにしている。」と述べている。ここでは便宜上、ソナタ形式の用語を用いる。

まずは楽章の冒頭から、クラリネットとファゴットそれぞれ1stと2ndの計4本を中心に、牧歌的な第1主題が奏でられます。この「牧歌的な」という表現を、あえて言い換えるのであれば、「ヨーロッパの田舎の農村で鳴っていきそうな、良い意味でのんびりとしてのどかな」といったところでしょうか。ヴィオラとチェロに、クラリネットの主旋律に呼応するかのような音(譜例3)がありますが、これがまるでやまびこのようなので、私には、田舎の農村とは言っても平野の農村ではなく、山の近くで牧畜をやっているような農村の景色が浮かびます。また、伴奏の管楽器はまるでそよ風のようなのです。

譜例3

この牧歌的な主題は盛り上がりを見せませんが、程なくして落ち着いてしまい、クラリネットとファゴット、次いでオーボエとホルンによってやや陰のある第2主題が奏でられます。この旋律の冒頭、同じ高さの音を2回繰り返す音型は、第2主題の伴奏で弦楽器が奏でるだけでなく、展開部の直前でも各楽器によって繰り返され、こちらはやまびこのようです。

展開部では、まず牧歌的な第1主題の変奏が、ファゴット、ヴィオラ、チェロによって、続いてヴァイオリンによって、3連符のシンコペーションという特徴的な伴奏とともに奏でられます。その後、伴奏は16分音符が支配的になり、そのまま再現部へと続きます。

再現部では、やはりまず第1主題が再現されますが、先述の通り16分音符の伴奏を伴っているため、冒頭とはやや違った印象を感じます。しかし第2主題については、その音型が顔を覗かせるものの、再現されるというほどしっかりと奏でられることはなく(このあたりが、明確にソナタ形式であると断言

できない理由の1つであると思います)、先にも登場した同じ高さの音を2回繰り返す音型の反響を経た後、第1主題を元にしたコーダへ入り、美しく静かに楽章が終わります。

## 第3楽章

3/8拍子のハ短調。三部形式。ここでは便宜上、各部をA-B-A'と呼称する。

第3楽章の冒頭、最初にチェロによって奏でられる主題(譜例4)は、満たされない思い、物悲しさといった感情を想起させますが、それでいて非常に美しく、この交響曲の大きな魅力の一つとして挙げないわけにはいかないでしょう。

譜例4

この主題は、1961年のアメリカ映画『さよならをもう一度』で使用されており、認知度が高いようです。(執筆者は知りませんでした...)我々エッセツ・フィルハーモニカーは、ポスターやパンフレットの絵を、デザイナーさんに依頼して描いていただいておりますが、今回の第5回では、この映画の冒頭シーンを参考にデザインしていただきました。ある意味で、この主題が本演奏会の“顔”というわけです。

12小節から成るこの旋律は2度の下降が印象的ですが、この2度の下降の音型が現れる位置は、2,4小節目では1拍目、5,6小節目では3拍目、7小節目では2拍目の裏...といった具合に一定ではなく、この点は、この旋律が持つ独特の美しさに一役買っているのではないかと考えています。

また、ヴァイオリンやヴィオラによる波のような伴奏も、メロディの悲哀感を一層強めます。悲しみに揺れる心を表しているような気もしますし、はらはらと流れる涙のようでもあります。

楽章の冒頭でチェロによって示された物悲しい主題はヴァイオリンが引き継いで再び奏し、その後少しの間長調で音楽は進むものの、すぐに短調に戻り、フルート、オーボエ、ホルンが再び主題を演奏すると、中間のBに入ります。

Bでは、管楽器がやや躍動感のある旋律を奏でた後、対照的に弦楽器が幅の広いゆったりとした旋律を奏でる、ということを2回繰り返します。2回目の弦楽器の旋律の後、木管楽器が楽章冒頭の主題の最初の音型(3度の上昇)を奏で、A'を予感させます。

A'では、まずホルンが主題を再現し、これをオーボエが引き継ぎます。Aでは管楽器3パートによって奏でられていた部分は、今度はヴァイオリンとチェロによって演奏され、それが終わると、短いコーダを経て悲愴感を漂わせながら楽章を終えます。



さて、この交響曲を代表する、と言っても過言ではない第3楽章の主題は、先述の通り、「チェロ」、「ヴァイオリン」、「フルート、オーボエ、ホルンの3パート」、「ホルン」、「オーボエ」、「ヴァイオリンとチェロの2パート」によって奏でられ、楽章全体を通して6回、同じ主題を様々な音色で楽しむことができます。ぜひ、それぞれの音色の魅力をお楽しみください。

## 第4楽章

2/2拍子。へ短調からへ長調。ソナタ形式。

まずは弦楽器とファゴットによって第1主題が示され、オーボエを除く木管楽器がこれを繰り返します。なお、この木管楽器による繰り返しでは一部の音が引き伸ばされており、野本先生はこの点でも「拍節感の不明瞭化」と述べています。(譜例5,6。弦楽器からはヴィオラ、木管楽器からはフルートを抜粋しています。)

譜例5

譜例6

この2回の第1主題の呈示の後には、「やや陰のある」と述べた第2楽章の第2主題が、少し形を変えコラール風になって続きます。トロンボーンによって導かれ、木管楽器と全ての弦楽器によって演奏されるためか、第2楽章に出てきたときと比べてやや荘厳な印象を受けます。

その後、(この楽章の)第1主題の変形(譜例5,6ではスペースの都合上省いた後半部分が主)を用いた推移部を経て、第2主題へと移ります。3連符を用いた疾走感のある長調の旋律で、まるで草原を抜ける風のような感じです。これが終わると、音楽はすぐに力強い短調に戻り、高められた後、第1主題の断片を見せながら落ち着き、展開部へ入ります。

展開部は、木管楽器による第1主題から静かに始まり、第1主題の音型を変形させながらしばらく進みますが、ヴァイオリンの下降音型を合図に強奏となり、先程の、コラール風の第2楽章第2主題が、更に壮大に形を変えて登場します。ここにはもはや陰など全くなく、短調で高められた緊張は、一瞬長調になった瞬間に開放されたようにすら思えます。

野本先生によると、このすぐ後からが再現部であるとのことですが、「展開部そのものが主要主題にもとづいているため、再現部はショートカットされて、第30小節(推移部後半)からを再現したものとなる。」ということのようです。概ね呈示部と同じように再現されるものの、音楽が落ち着く箇所(先ほど「第1主題の断片を見せながら落ち着き」と述べた部分の再現)の直前では、チェロとコントラバスに第1主題が現れるなど、明らかな違いもあります。

その「音楽が落ち着く箇所」からコーダに入ります。コーダでは、とにかく目まぐるしく第1主題やその断片が様々な楽器によって演奏されます。まずコーダの冒頭では、第1主題を3連符に変形させた旋律をヴィオラが奏でますが、それを木管楽器が受け継いだかと思うと、譜例6のような形の第1主題がオーボエを除く木管楽器によって現れ、更にオーボエが(一部だけではなく)全体が引き伸ばされた第1主題を奏でる所で、テンポがやや緩み、長調となります。このオーボエには途中でフルートが加わるのですが、まるで分厚い雲が少しずつ晴れて、隙間から日が差すような印象を受けます。

テンポが緩み長調となった後、もはや第2楽章第2主題の面影はあまりありませんが、例のコラール風の音型が荘厳に奏でられます。個人的には、ここは金管楽器の響きが特に映える部分だと思いますので、ぜひ耳を傾けていただければと思います。

コラール風の音型を経て、ファゴットとチェロによる第1主題の断片が顔を覗かせた後、弦楽器がトレモロの弱奏で奏するのは、なんと第1楽章の第1主題(譜例1)です。ここで交響曲全体の冒頭に出てきたこのフレーズを用いるのは、筆舌に尽くしがたいエモさを感じざるを得ません。なんだかんだで、私がこの交響曲で一番好きなのはここかも知れません。

そのエモポイントの後、管楽器の長音とティンパニのトレモロに、弦楽器がピッツィカート添えて、この交響曲は幕を閉じます。

## ～簡単な用語解説～

### シンコペーションとヘミオラ

シンコペーションとは、誤解を恐れずに簡単に言うと、「通常とは異なった拍の取り方をすること」です。例えば4拍子なら1拍目から順に「強、弱、やや強、弱」、3拍子なら「強、弱、弱」という取り方が一般的ですが、これを取って崩したものをシンコペーションと呼びます。

ヘミオラは、こちらも誤解を恐れずに簡単に言うと、「シンコペーションを用いることによって、2小節にまたがった大きな3拍子を作ること」です。

### 三部形式とソナタ形式

どちらも曲の構成についての用語で、三部形式は、その名の通り3つの部分によって構成される曲に対して用います。A-B-A'という形を取っていることが多く、この交響曲の第3楽章もこのA-B-A'の形になっています。

ソナタ形式は、(序奏)-呈示部-展開部-再現部-(コーダ)によって構成されています。呈示部の中には、ふつう第1主題(主要主題)と第2主題(副主題)が存在し、つまり「この曲の主題はこんな感じですよ」と示すのが呈示部というわけです。展開部は、曲によって中身は大きく異なりますが、主題の変奏や変形をさせつつ、音楽を盛り上げていく形が一般的です。再現部は呈示部の再現なので、やはりこちらにも第1主題と第2主題が含まれます。序奏とコーダは必ずしも存在するわけではなく、実際、この交響曲の第1楽章や第4楽章には序奏は存在しません。また、呈示部は反復指定によって2回繰り返されることもあり、この交響曲でも第1楽章には反復指定があります。

(和田輝羽)



---

ヨハネス・ブラームス  
(アルノルト・シェーンベルク編)  
ピアノ四重奏曲第1番 (管弦楽版)

---



ブラームスプログラムの後半に演奏するのは、ピアノ四重奏曲第1番。「出演者リストはチューバ、パーカッション・・・あれ、ピアノは?」「四重奏曲・・・舞台に出てきた演奏者は数十人いるけど?」「ピアノもない、四重奏でもない・・・これってタイトル詐欺では?」そう思った方がいらっしゃれば正解だ。ヨハネス・ブラームス(Johannes Brahms/1833-1897)が作曲した、ピアノとヴァイオリン・ヴィオラ・チェロという室内楽により演奏される原曲は、アルノルト・シェーンベルク(Arnold Schönberg/1874-1951)の編曲によって、「ソナタ形式の楽章を持つ管弦楽の作品」という交響曲の原初の定義に立ち返ればもはや交響曲と呼ぶことすらできる作品へと生まれ変わっている。シェーンベルクの作曲家人生を切り口に、この作品を読み解いていく。

---

Max Fenichel - [https://www.bildarchivaustria.at/Pages/ImageDetail.aspx?p\\_iBildID=1208877\\_circa\\_1930\\_パブリック・ドメイン\\_https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Arnold\\_Sch%C3%B6nberg\\_\(1874%E2%80%931951\)\\_~1930\\_%C2%A9\\_Max\\_Fenichel\\_\(1885%E2%80%931942\)\\_OeNB\\_1208877.png](https://www.bildarchivaustria.at/Pages/ImageDetail.aspx?p_iBildID=1208877_circa_1930_パブリック・ドメイン_https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Arnold_Sch%C3%B6nberg_(1874%E2%80%931951)_~1930_%C2%A9_Max_Fenichel_(1885%E2%80%931942)_OeNB_1208877.png)による

## 1. シェーンベルクの半生とブラームスへの傾倒

シェーンベルクは1874年、オーストリア・ウィーン市街の北部にてユダヤ人の両親のもとに生まれた。彼の両親はいずれも音楽とはほとんど無縁であり、この時代の著名な作曲家には珍しく、彼は音楽院などでの良質な音楽教育を受けることができなかった。そのため、彼は独学で作曲を究めるほかなく、その過程ではほかの作曲家の作品を研究材料として技法や理論を学んでいくことが多かったと想像される。いわば作曲のリバースエンジニアリングと言ったところであろう。ロマン派真っただ中のウィーンでこのころ活躍していたのは、ほかでもないブラームスであり、前時代・同時代の作品から逆行的に作曲を学んでいく中で、彼はブラームスにも傾倒していったのだろう。その成果として、独学でありながら、シェーンベルクは室内楽作曲の分野で頭角を表し、1905年に弦楽四重奏曲第1番を、1906年に室内交響曲第1番を作曲した。これらはいずれもコンパクトという室内楽曲の従来のイメージを覆す規模(長さ・大きさ)の作品であり、交響曲のそれに近づいたものともいえた。すなわち、これまで分野として交わることのなかった、室内楽と交響曲の融合が目指された作品群であったともいえる。

これまでは決まった調性のある音楽という従来の世界観での作曲だったが、これ以降シェーンベルクは無調音楽という未知の世界の研究に没頭していく。無調音楽は20世紀以降のいわゆる現代音楽の軸となる概念であり、シェーンベルクのこの変節はいわば現代音楽の勃興であった。つまり、彼は現代音楽の先駆けとして音楽界に20世紀の時代の波を起したのである。一方で、20世紀の時代の波は彼自身の人生も激しく狂わせていくことになる。ナチスドイツが台頭するとともに、ドイツ勢力圏におけるユダヤ人への迫害が激化していったのだ。その結果、1933年にシェーンベルクはウィーンを離れ、アメリカに亡命することを余儀なくされた。亡命後の彼はロサンゼルスにて『ラブソディー・イン・ブルー』で有名なガーシュインの近所に住み親交を結んでいたという。また、アメリカの大学で教壇に立つようにもなったが、教育活動に携わり自身の若き頃の独学の過程を思い出す中で、作曲教育においてブラームス以前の古典的作品の学習に立ち返ることの重要性を再認識したのか、古典的作品を理論的に解説するような著書・講演がこの時期多くなる。そのような中、1937年に編曲されたのがこのブラームスのピアノ四重奏曲第1番である。

ここまで見れば、この編曲はシェーンベルクの作曲家人生のキーが詰まった作品であると言えるのだ。1つは、ブラームスという彼の愛した古典的作品を編曲というリメイクにより近代化したうえで20世紀に復古させたことだ。教育者シェーンベルクとして、ブラームスに再注目することは、作曲家シェーンベルクにとって、人生の来た道に戻り出発点に立ち返る、そんな行為だったのである。そして、もう1つは室内楽曲と交響曲の融合というテーマだ。ソナタ形式の楽章を持つピアノ四重奏曲の管弦楽への編曲は、彼自身が作曲した室内交響曲とは



別の形で室内楽と交響曲との融合といえた。彼自身、冗談めかしてこの作品を「ブラームスの5番」と呼んだが、それはこの作品を“誰かの”交響曲ととらえる彼の潜在的な認識の発露だったのかもしれない。

そのような意味で作曲家シェーンベルクのひとつの集大成というべき作品がこのピアノ四重奏曲第1番である。

## 2. 作品の構成

この作品は「ブラームスの管弦楽」ではあるものの、ブラームスの交響曲とは異なり、楽器の編成は近代的な3管編成に拡張され、打楽器もティンパニのみにとどまらず、シロフォンやタンバリンといった多様な楽器が用いられている。そのため、オーケストラの様式自体はブラームスというよりはどちらかといえばマーラーやツェムリンスキーと言った、19世紀末ウィーンの作曲家たちの様式に近いものとなっている。一方で、より細部なオーケストレーションに注目すると、ブラームスが室内楽の原曲で意図した音楽性を、管弦楽の楽器の多様性を生かしてより陰影や変化をつけて表現する試みがなされていることがわかる。例えば第1楽章において、3連符がひとつながりのピアノのバッセージ(譜例1)を、木管楽器の中で1音目と2音目・3音目に分割し1音目を4分音符とすることで(譜例2)、音色に変化を持たせつつ、ピアノの鍵盤の響きの残り方を再現する、という非常に考えられた技法がみられるのである。些細な違いではあるものの、編曲にあたってこういった細やかな工夫が随所に見られることも、シェーンベルクのブラームスに対する多大な敬意を感じるこの点である。

Pno. 譜例1

EsCl. Fl. Cl. 1 譜例2

今回は、前半のブラームスの交響曲第3番で純粋なブラームスのオーケストレーションを存分に堪能いただけるので、ぜひ前半とのオーケストレーションの違い、シェーンベルクの工夫に注目してお聴きいただければ幸いです。

## 第1楽章：ソナタ形式

3本それぞれ長さの異なるクラリネットのユニゾンによる第1主題の提示に始まる重厚なソナタ形式の楽章。最初の4音(D-B-Fis-G)が重要な動機として展開されていく。特に注目すべきは、原曲においてピアノの強奏と弦楽器の弱奏の1小節ごとの応答の繰り返しとなっていた部分が、編曲版では異なる管弦楽器が1小節ごとに入れ替わって次々に主題の一部の動機を演奏する形で、より多彩な音色を楽しめるように変化している点だ。原曲においてピアノと弦楽器の音量バランスが悪い傾向に不満のあったシェーンベルクのひとつの回答として、音色の入れ替わりを楽しむようにすればよいのでは、という提案なのだろう。

## 第2楽章：間奏曲

主部においては冒頭から3連符の無機的で単調なリズムがトリオ部に移るまでのほとんどを貫いている。トゥッティとなつての頂点での盛り上がりも抑制的でどこか空虚さが漂っている。一方、終始長調で展開され、軽やかな旋律が楽しげなトリオ部は主部と好対照をなしている。頂点ではトリオ部冒頭の旋律がカノンのように重ねられ軽やかながら音の厚みを表現すると、音楽は急速に冷え込んで主部の冒頭に戻る。主部は最初と同じように進むが、トリオ部直前のハ長調がコーダへのつながりを誘い、ひとときの間ハ長調に変わったトリオ部の音楽が遠くに思い出されて終わりに至る。

## 第3楽章：

非常にブラームスらしい変ホ長調のコラールにより始まる。コラールと、管弦楽器の応答が繰り返されたのち、ティンパニが入ってくるとゆったりとした曲調は徐々に方向を変え、主調がハ長調へと移り変わると同時に行進曲風の間中部に突入する。最弱音で始まったのが曲想の移り変わりを繰り返すうちにティンパニ以外の打楽器も交え盛り上がりつつ、頂点に達した次の瞬間には長調から短調に切り替わり、冒頭のテンポに向かって減速していく。ハ短調に変わった冒頭のコラール主題がホルンにより再現されると再び場面転換し、コラール主題が変奏されながら繰り返されて、音楽は穏やかに終わりへと向かう。



#### 第4楽章：「ツィゴイネル風ロンド」

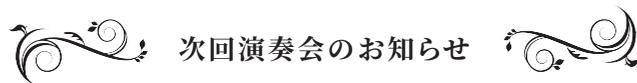
ツィゴイネルといえば、作曲家サラサーテのバイオリンソナタ「ツィゴイネルワイゼン」が思い出されるだろう。あちらは邦語訳では「ジプシー風の旋律」となるが、この楽章の場合は「ジプシー風の回旋曲(ロンド)」である。このロンドとは、異なる旋律を途中挟みつつ同じ旋律を何度も繰り返していく形式を指しており、今回の場合は冒頭からゲネラルパウゼ(オーケストラ全体の一時休止)までのジプシー風の主題が、他の旋律を挟み込んで繰り返されるという構成になっている。

原曲では楽章の終盤にピアノによるカデンツァが2度(長いものと短いもの)現れるが、編曲版ではいずれもクラリネットに置き換えられている点が興味深い。いずれも下行形のグリッサンド的な音形であり、そこにクラリネットを採用したことに、どこことなくガーシュインやアメリカのジャズ音楽の影響を見ることもできるかもしれない。2度目のカデンツァの後には原曲を思い出してヴァイオリン・ヴィオラ・チェロによる弦楽三重奏が展開されるが、それをきっかけにテンポは加速をはじめ、はじめは断片的だったジプシー風の主題が完全に形を取り戻して現れると、音楽は最後の頂点に至り、熱狂的になだれ込むかの如く、幕を閉じる。

(菅野勇斗)

#### 【参考文献】

浅井 佑太. (2023). 『作曲家◎人と作品シリーズ シェーンベルク』. 音楽之友社.  
石田 一志. (2012). 『ブラームス/シェーンベルク ピアノ四重奏曲第1番』「解説」. 全音楽譜出版社



#### 次回演奏会のお知らせ



第6回定期演奏会  
2026年1月25日(日) 昼公演  
ミューザ川崎シンフォニーホール  
指揮 齊藤栄一

#### \*曲 目\*

- R. シュトラウス／ウィーン・フィルハーモニーのためのファンファーレ
- R. シュトラウス／歌劇「ばらの騎士」組曲
- R. シュトラウス／アルプス交響曲

# Member

コンサートマスター：小染慶

## 第1 ヴァイオリン

阿部優太  
片山なつみ  
◎ 小染慶  
近藤和  
田村奈津子  
原田碧  
久光幹太  
平野愛莉  
前澤郁弥  
三野真柚稀  
宮崎怜子  
村部一星  
諸岡咲良  
劉守珩  
渡邊梓

## 第2 ヴァイオリン

新垣光琉  
荒金香帆  
岡田莉沙  
岡村昂洸  
落合友佳里  
小林奏詠  
清水花凜  
鈴木紗羅

高杉暁音  
高原苑  
◎ 田代新  
森勇人  
山本妃奈乃

## ヴィオラ

伊奈裕貴  
小川雄成  
鈴木千奈  
高岡広太郎  
◎ 高橋熙  
土谷夏仁  
那須央幸  
深澤美貴  
古荘智佳子  
松井歩  
宮崎春菜  
山本祐希奈

## チェロ

稲葉理乃  
内田夏音  
金子将翔  
川人敦  
木村優

佐藤望羽  
◎ 原田大成  
舟橋星浦  
松本紗夜  
宮崎晏佳  
吉海拓真

## コントラバス

上野未夢  
岡崎愛  
片山朔杜  
草山雄杜  
栗田真帆  
◎ 小島辰仁  
清水樹  
丸尾麻  
盛田明雅  
和田輝羽

## フルート

今城琴美  
大山司  
小川真央  
高田颯音  
◎ 滝原真琴

## オーボエ

◎ 菅野勇斗  
黒川達郎  
小島みなみ  
寺田晴香  
山本菜緒

## クラリネット

越智健介  
小林桃子  
田中秀和  
◎ 山岸雄作  
吉田紗雪

## ファゴット

伊藤綾香  
◎ 薄井潤一郎  
野口滉太  
萩田智樹

## ホルン

池水香穂  
大沼菜摘  
大場祐香  
大山美佳  
片山銘弥

## 清水颯太

◎ 満石卓斗

## トランペット

◎ 倉林佳祐  
櫻木ころも  
中瀬涼太

## トロンボーン

青木俊輔  
◎ 石井志歩  
鈴木亮太郎  
山田萌楓

## テューバ

井上拓

## パーカッション

◎ 安西理玖  
高良佑佳  
小林大治朗  
高橋奏良  
箱田健太

◎：パートトップ

### トレーナー（敬称略）

内山厚志 古野淳  
齊藤栄一 柳澤崇史  
鈴木明博 山田裕治  
林憲秀

### 運営委員

委員長  
清水颯太

### 委員

安西理玖 小川真央 小染慶 田中秀和 山岸雄作  
今城琴美 菅野勇斗 高岡広太郎 野口滉太 和田輝羽  
岡村昂洸 小島辰仁 滝原真琴 松井歩

### フライヤー・パンフレットデザイン

水本紗恵子



チラシを持ち帰らずとも、今後の演奏会情報が  
スマホで確認できるようになりました！

---



演奏会の概要



演奏曲の試聴



チラシ画像



プロモーション動画



楽団からの  
メッセージ



楽団のWebサイト  
SNS

スマホのカメラを起動し、こちらのQR  
コードにカメラをかざしてください



Powered by



Orchid



YouTube

Mail : [essenz.philharmoniker@gmail.com](mailto:essenz.philharmoniker@gmail.com)  
X : @Essenz\_phil  
Instagram : @essenz\_phil

[発行] 2025年2月2日(日)  
[編集] エセンツ・フィルハーモニカー

※無断複写・転載などを禁じます。